中国古典文学（概要）

参考文献

平凡社「中国古典文学大系」６０巻、他

久野正博

平凡社「中国古典文学大系」６０巻

最初に

私が始めて中国古典文学を読んだのは、多分２０歳のころでした。
平凡社「**中国古典文学大系**」の「**水滸伝**」を読み、非常に面白かったため、次に読んだ本が、
「**三国志演義**」です。

これが、水滸伝に拍車がかかったように面白い本でした。中国古典文学とは、これほどに面白いのか？
と思い、それ以後、次から次へと読み進んだことを覚えています。

そのうち、平凡社**「中国古典文学大系」６０巻**全てをそろえ、いつかは、全巻を読破しようと思うよう
になりました。

量が膨大でなかなか全てを読破することは、未だに、果たせていません。しかし、その中でとりわけ
素晴らしいと思う本を皆さんに読んで頂きたいと思い、中国古典文学概説をしたためました。

私の独断ではありますが、第一番に推薦する本が、司馬遷の「**史記**」です。
その次に、「**三国志演義**」「**水滸伝**」と言った所でしょうか。
又、特異なところで、「**戦国策**」「**聊斎志異**」「**孫子**」「**金瓶梅**」「**論語**」です。
「**金瓶梅**」の詳細は、後に述べていますが、嫌らしいというようなポルノ小説ではありません。
立派な文学書であり、中国の古い風俗習慣等が描かれていて、色々な小説を読むのに大変役にたちました。

かって、中国古典は、日本の知識人の間では、常識的に読み継がれてきました。

特に、戦前の日本人の知識の基本、根本をなしていたのでは？と思っています。

日本の文化、文学に与えた影響は非常に大きいと思います。

それは、単なる教養のためでは無く、人生の書であり、人生の指針がそこに隠されているか

らだったと思います。

以下に、私の独断ですが、中国古典文学の概要を説明します。

日本人があまり日本の古典を読まないように、中国の人もあまり中国の古典を読まないようです。

私は、最近日本の古典も読むようになりましたが、本当に中国古典文学は面白いです。

これを機会に、是非、読んで頂きたいと思います。

中国古典文学は「史書」「政治論」「思想書」「小説、戯曲」「記録文学」「詩」「自然科学書、その他」におよそ分類される。（色がついている書は読んだことがある本。**赤字**の本は特にお勧め。）

史書・・・・・「春秋左氏伝」「**戦国策**」「**史記**」「漢書」「後漢書」「三国志」

政治論・・・・「貞観政要」「宗名臣言行録」

思想書・・・・「**論語**」「孟子」「荀子」「**易経**」「大学」「中庸」「**老子**」「**荘子**」「**孫子**」

（諸子百家）　「韓非子」「抱朴子」「神仙伝」「列仙伝」「山海経」「顔氏家訓」「菜根譚」

小説、戯曲・・「捜神記」「遊仙屈」「杜子春」「**聊斎志異**」「**三国志演義**」「**水滸伝**」「西遊記」

「**金瓶梅**」「平妖伝」「紅楼夢」「儒林外史」「三侠五義」「今古奇観」

記録文学・・・「洛陽伽藍記」「大唐西域記」

自然科学書・・「本草綱目」

詩・・・・・・「詩経」「屈原」「曹操・曹丕・曹植」「**杜甫**」「**李白**」「**王維**」「**白居易**」「**蘇軾**」

「史記」・・・作者　司馬遷

司馬遷　前漢の時代（前１４５年）に生まれた。父の司馬談の後を継ぎ、３９歳の時、太史令となる。太史令となったことで、宮中の文献や記録を自由に見ることができた。それ以前に、２度、中国各地を旅行する。太史令となって程なく、「李陵事件」で屈辱を受ける。武帝は、李陵が匈奴に降伏したことを大変怒った。これに対し、司馬遷が擁護し、武帝の怒りを買い、死刑又は宮刑の判決を受ける。当時の知識人であれば、屈辱的な宮刑を受けるのを恥じとし、死刑を受けるのが当然であった。しかし、父の遺言でもあった「春秋」に続く歴史書を書くため、宮刑を受ける。これ以降、司馬遷は史記を書き続け、前９１年ころ完成する。その内容は、心に積もった憤り、奢れる者の必衰、様々な人物の歴史（生きざま）等を書き残した。伝説上の三皇五帝から、殷、周、春秋戦国、秦、漢の武帝の時代までの約三千年間の中国の歴史を綴る。

最も推薦する本。とにかくこの本を読んで欲しい。それくらいすばらしい本です。
色々な人間の生きざまを綴った本。司馬遷の思いが込められている本。

以後、中国の歴史書は殆ど全て紀伝体で書かれる。
紀伝体・・・・個個人の歴史書。編年体は年代順に書かれた歴史書。

太史令・・・・暦や記録をつかさどる役職。代々、司馬氏が継いできた。
李陵事件・・・武帝の時代、名将李広の孫、李陵は、匈奴征伐に五千の兵を率いて、匈奴の奥深く進軍し、匈奴の主力部隊十万と戦う。援軍が全く無い中、激闘の末、降伏した。

【本紀、世家、表、書、列伝】

「項羽本紀」「高祖本紀」「秦始皇本紀」
「斉太公世家」「越王句践世家」「孔子世家」「陳渉世家」
「韓信列伝」「孫子列伝」「刺客列伝」「匈奴列伝」「貨殖列伝」「滑稽列伝」・・・・

史記には、殷の時代の王様が順に記載されていたが成否は不明であった。
殷の時代の遺跡調査で、亀甲文字から殷の時代の王様の記載が見つかり、司馬遷の記述が正しいことが判明した。

司馬遼太郎の小説「**項羽と劉邦**」は、司馬遷の史記「項羽本紀」「高祖本紀」その他列伝等をつなぎ会わせ、一つの小説にまとめあげている。ちなみに、司馬遼太郎の名前のいわれは、「**司馬遷に遼（はるか）に及ばざる日本の者（故に太郎）**」から来ている。

孟嘗君列伝（戦国時代の四君の一人）

戦国時代、斉の人。名は、田文。斉の王家の子孫で父、田嬰は、斉の宰相を務める。田嬰の息子は、４０人余りいた。生まれた日が悪く、殺されかかったが、危うく難を逃れ成長する。成長し、機知に富む聡明な人物となった。そのため、田家の跡継ぎとなった。客人は、日ごとに増え、諸侯の間に、名声は広まっていった。食客は、身分に関係なく平等にもてなした。平等と言いながら、食事等に差別をしているのでは無いかと疑う食客がいたが、やはり平等の扱いをしていたことがわかる。この噂を聞き、食客は、ますます増え、数千人にも上った。役に立たない食客と他人から言われても、平等に扱った。役に立たないと言われた人が、役に立った話し。

人より優れたものを持っていると、意外なところで役に立つ。

鶏鳴狗盗・・・孟嘗君が、秦に派遣された時、秦の昭王に幽閉されかかった。孟嘗君の食客の一人が、白狐の毛皮を昭王から盗みだし昭王の寵姫にプレゼントして、取りなしを頼んだ逸話。その後、孟嘗君が、函谷函関と言う関所を抜けるとき、ニワトリの鳴き声をまねし、一番鶏を鳴かせ、関所を通り抜けた逸話。

春申君列伝、平原君列伝、信陵君列伝

それぞれ食客が数千人にもいた。

司馬遷は、戦国時代の四君の生き様を書く。人生を全うした者、欲望の果て、非業の死を遂げた者。

淮陰侯列伝

名は、韓信。「韓信の股くぐり」

漢の高祖、劉邦が天下を取るのに、戦術的に最も貢献した人。楚王に封ぜられる。

後に、淮陰侯に格下げられる。劉邦の妻、呂后に殺される。

「**狡兎（こうと）死して走狗（そうく）煮らる。**」

「狡兎」とは、ずる賢い兎。「走狗」とは猟犬のこと。ウサギ狩りに必要な犬も、ウサギを捕まえてしまえば、ご用済みとなり、煮て食われてしまうと言うことわざ。

李将軍列伝

若い時から匈奴との戦いに従軍し、数々の戦功によって、匈奴から、漢の飛将軍と恐れられた李広将軍の列伝。口数少なく、部下と寝食を共にし、思いやりが深かった。

作戦上の失敗を追求され、みずから首をはねて死んだ時、司馬遷が追悼して言った言葉。

「**桃李もの言わざれども下自ずから蹊（けい）を成す**。」

桃や李の木は花を咲かせ実をつける。何も言わなくても人が集まってきて、その下には自然に道ができる。

徳、知恵のある人、慕われる人の廻りには黙っていても人が集まってきて、小道が出来ると言う意。

【**成蹊**】・・・「成蹊大学」の成蹊はここに由来する。

成蹊大学へ行ったことのある人に、「多分、小さな林のようなところがあり、散策できる細い道があるだろう。」と訪ねたところ、有るとのことでした。

成蹊（こみち）幼稚園

司馬遷、このような人物も列伝に入れている。

刺客列伝（５人）

荊軻（けいか）は、衛の人。

燕に移住して来て、燕の太子丹から、秦王政（始皇帝）の暗殺を依頼される。将軍の首を持ち、易水のほとりで、「**風蕭々として易水寒し、壮士ひとたび去ってまた還らず**」と詠じて秦に向かった。暗殺は失敗し、殺される。又、燕の太子丹もその後、殺される。

貨殖列伝（かしょく）

お金持ちになり、出世欲を出さず、人生を全うした者の話。

滑稽（こっけい）列伝

人を笑わせて、自分の危機を逃れた者の話。

【ことわざ、四文字熟語の宝庫】

「**四面楚歌**」

項羽本紀に書かれている。・・・・垓下の戦いで漢軍が項羽を包囲し、項羽軍の四面を取り

囲むようにみな、項羽の故郷である楚の歌を歌うのを聞く

「**奇貨居くべし**」呂不韋列伝

始皇帝の父親？（荘襄王）が趙で人質になっていた時、援助した。そして評判を上げた後、秦の位の高い妃に養子にするよう勧めた。妃は子供がいなかったため、喜んで養子にして、それを王様にも認めてもらった。その後、王様が亡くなった後を継ぎ、荘襄王となった。その前に、荘襄王は、呂不韋から愛妾をもらい受けていた。**もらい受けていた時には、既に妊娠していた？**　そして、生まれた人物が、後の「秦の始皇帝」である。呂不韋は、荘襄王の時、宰相まで登りつめるが始皇帝の時代に殺される。

キングダム

完璧、焚書坑儒、封禅、臥薪嘗胆、管鮑の交わり、刎頸の交わり、痛み骨髄に入る、一心岩をも通す、馬を華山の陽（みなみ）に放つ、遠交近攻、燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや、合従連衡、曲学阿世、鶏口牛後、逆鱗、国士無双、先んずれば人を制す、左袒、酒池肉林、食指を動かす、宋襄の仁、太公望鳴かず飛ばず、背水の陣、隗より始めよ、右に出るものなし、夜郎自大、禍を転じて福と為す

背水の陣、鼎の軽重を問う

「**戦国策**」　　韓、魏、斉、趙、燕、楚、秦

戦国時代の策謀を記した本。戦国時代、舌先三寸で諸国を渡り歩いた遊説の士の弁説と権謀術数。

国別に構成。司馬遷はここから引用している箇所がある。戦国時代の逸話を集めた短編集。

一方的に主張しても相手の国は動いてくれない。相手の国にも利益になるように説得する術。

「いかに相手の国を、自分の国が有利になる為に動かすか」その策略、権謀術数

今の政治家は、絶対この本を読むべし。

「**士は己を知る者のために死し、女は己を説（よろこ）ぶ者のために容（かたちづく）る。**」

予譲（よじょう）は、晋の人。智伯に仕えた。あまり人に認められなかったが、智伯は高く評価して優遇した。

先の先を読まなければ、命があぶない話

・鼻を削がれた話　女性の弱い立場、殉葬（周りから？）

・娘を嫁がせた国を乗っ取る話

「蛇足」「鶏口牛後」「漁夫の利」「まず隗より始めよ」「遠交近攻」「合従連衡」

「壮士ひとたび去って還らず」「虎の威を借る狐」

「漢書」「後漢書」「三国志」

殷→周→春秋、戦国→秦→漢→新→後漢→三国時代→晋→五胡十六国、南北朝時代

→隋→唐→五代十国→北宋→南宋→元→明→清

「漢書」後漢の班固の選と言われる。

高祖の建国、武帝の匈奴征伐、王莽、など前漢の史実を記載。

司馬遷は、武帝の時代の人。

「後漢書」三国志の後、南宋の時代に書かれる。

「三国志」晋の陳寿の選

後漢の滅亡による三国鼎立から晋の統一までを記述。

魏を正統とし、曹操は悪玉にされていない。

三国志演技と比較すると面白いが・・・

「貞観政要」

唐の太宗とそれを補佐した名臣たちの政治問答集。帝王学の教科書

上に立つ者の必読書と言われる。指導者の心構え。

唐の太宗・・・李世民　　玄武門の変、李建成、李元吉、李淵、魏徴

「創業と守成といずれか難き」

「君は舟なり、人は水なり」

「林深ければ鳥棲み水広ければ魚遊ぶ」

「臣をして良臣ならしめよ、忠臣とならしむなかれ」

王義之・・・書の神様

　李世民は、王義之の書を集めた。書の最高傑作と言われている「蘭亭序」は、模写のみが

　残っている。本物は、自分の墓に埋葬した。

「論語」

孔子の言行録。孔子とその弟子たちとのことばや行動、問答などを記録したもの。

紀元前４５０年ごろ成った書

「朋遠方より来るあり、また楽しからずや」「巧言令色、鮮し仁」

「過ちてはすなはち改むるに憚るなかれ」「子曰く、吾十有五にして学を志し、三十にして立ち、

　四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳従い、七十にして心の欲するところに

　従いて矩をこえず」「学びて思わざればすなはち暗く、思いて学ばざればすなはち殆し」

「ただ、女子と小人は養い難しとなす」「学びて時に之を習う、亦悦ばしからずや」

「温故知新」「義を見て為さざるは勇無きなり」

「老子」　「荘子」

胡金定先生の話を良く聞き、本を何回も読む。素読する。

「易経　周の時代に原型が出来たので「周易」と言うこともある。四書五経の一つ

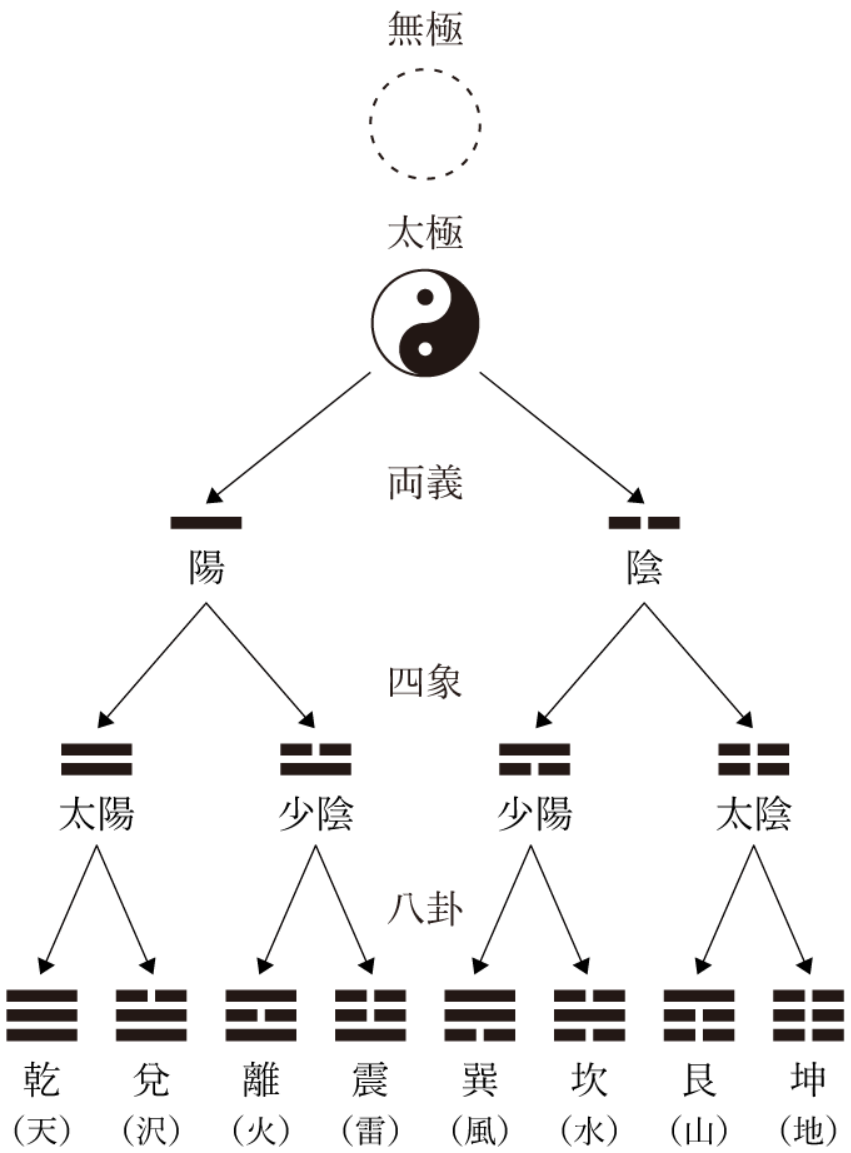
原書はあまりにも長いので、解説書を読んだ。非常に面白かった。
中国の古典小説に時々易で占う場面が出てくる。小説では、完璧に未来の事象を当てている。

「当たるも八卦当たらぬも八卦」と言われるが、内容的には非常にためになる含蓄のある言葉が多い。
良い卦が出ても油断せず、悪い卦が出てもくよくよせず、前向きにとらえれば非常にためになると思
います。
人生の指針。悩み事の解決、糸口。おごり高ぶりを戒める。森羅万象を表している？

８通りの卦を２回占い、合計６４の卦の内容で判断する。　　筮竹、算木

姓名判断、手相、人相判断、風水

サラリーマンの時、定年退職したら、大道易者になろうと思った？


無極
太極
両義
陽
陰
四象
太陽
少陰
少陽
太陰
八卦
乾
（天）
兌
（沢）
離
（火）
震
（雷）
巽
（風）
坎
（水）
艮
（山）
坤
（地）

「乾為天」（けんいてん）登り過ぎた竜

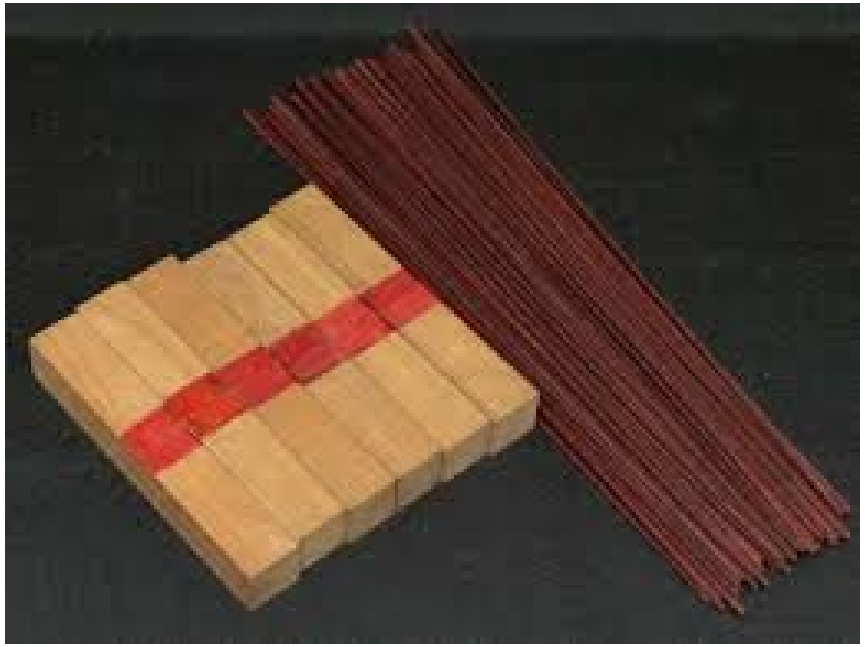
「登り過ぎた竜は下るしかない。」万事、焦ってはいけない。男性の壮年期、社会的な立場からも、家庭的にも責任が重く、仕事を手一杯やっている、家族の責任を考えなければならない中年の男性。まず仕事に精を出すしかない。女性なら、忙しくて、外ばかりとび歩いていて、家庭落ち着けない人。この卦は「堅い」意味が有り、役所関係、法律関係、試験には大変良い卦。

「坤為地」（こんいち）おとなしい雌馬

牝馬のようにおとなしく自分の道を守っていれば、まもなく道が開ける。万事控えめに争わないほうが良い。男性なら、まじめであるが少したよりにならない。女性ならば、やさしい世話女房で、子供にもいい母親になれる人。しばらく忍耐努力すれば、好転のチャンスがつかめる卦。

「地天泰」（ちてんたい）柔静の内に豊かな力を秘める卦。柔よく剛を制する道を示す。和合、安定を示す理想的な卦。但し、大吉は凶に転ずる。自戒が必要。易者の看板

「天地否」（てんちひ）八方ふさがりの卦。不安定、食い違い、行き詰まりの状態。



命理工作室
學權威・八字紫微・奇門遁甲・陽宅佈局・易經占卜・開運印鑑專家
名診斷100元・問一事500元（戀情・事業・財運・健康）
正統
易經卜卦

鑑專家
健康）
手珠專家
開運手珠專家
正統
易經卜卦

「孫子」　「孫子の兵法」　　十三篇に分かれていて、兵法を記す。

始計篇　　「兵は国の大事なり」「算多きは勝ち、算少なきは勝たず」

軍形篇　　「戦上手は、方針を明確にし、体制を整える」

兵勢篇　　「勢いに求めて人に責めず」

　　戦上手は、勝敗の要因を勢いの作用に求めて、兵士個々人の能力には求めない。

作戦篇　　「短期戦が理想であることを強調している。」

謀攻篇　　「百戦百勝は善の善なるものにあらず」戦わずに勝つことが最高である。

　彼を知り己を知れば百戦あやうからず。

虚実篇　　「相手の虚を突く」

軍争篇　　戦闘の心得。「疾如風　徐如林　侵掠如火　不動如山」

　その疾きことは風の如く、その徐かなることは林の如く、侵掠することは火の如く、動かざることは山のごとし。

九変篇　　「攻撃にさいし注意すべき九つの変法」呉越同舟

行軍篇　　「戦場へ行く場合の心得」

地形篇　　「将の心得」

九地篇　　「敵味方のおかれている状況を九つに分類」「死地」に身をおき必死の捨て身になること。

火攻篇　　「火責めの原則と方法」「名君・良将の道を説く」

用間篇　　「間者を用うる」情報活動。敵を知る。

「抱朴子」「神仙伝」「列仙伝」「山海経」

「抱朴子」　仙人になるための理論と実習を説く。道家の古典。葛洪（３７０年頃）内篇、外篇

不死の仙人が存在することを論理的に説く。

「故郷を捨て、嵩山に登る」

修行も大事だが、仙人になるには仙薬が絶対である。

仙薬の研究。もう少しで仙薬が出来る。あとほんのちょっとだけの何かが足りない

だけでである。　但し、仙薬→水銀を基本とする。

「神仙伝」　古仙人伝の集成　　９０余名の古仙人の列伝

彭祖七百六十七歳になっていたが老衰はしていなかった。・・・・・・・・・・

仙人の神出鬼没の行動、仙薬の効能、養生の方法・・・・・・・

「列仙伝」　最古の仙人列伝。　７０名の仙人の列伝

実在した人物も描かれていて、実は仙人だったとしている。

「白鶴に乗る仙人」「鯉に乗る仙人」「鳳凰にのる仙人」

中国は、八仙人、日本は七福神

久米仙人の話　徒然草（色欲の戒め）（鎌倉時代末期）　今昔物語（平安時代末期）

「山海経」　荒唐無稽な地理書？中国古代神話の宝庫。

東へ五百里、金、玉が多い。韮のような青い華、これを食えば飢えない。

良く走る猿のような生き物、これを食えば良く走ることが出来る。

比翼の鳥。西へ二千九百五十七里。十個の太陽。人面獣身の神々。

「顔氏家訓」　南北朝時代（５９０年頃）顔之推が子孫の為に書き残した教訓等の書

動乱の中を生きた一人の知識人が子孫に書き残した人生と生きる為の指針。

隋に統一される前、国が興ったり、滅びたり。非常に生きにくい時代に儒教に裏打ちされた

保守的誠実さを持ち続けた。

「しつけは早くしなさい。」

「子供の偏愛を慎むべし」

「父子の関係」

「人との接し方」

「菜根譚」　１６４４年頃の書　　洪自誠の著

簡素な生き方の中にこそ真に充実した人生がある。処世の警句集

権謀術数を知りながら悪用しない人は人格者である。

贅沢な者は、どんなに財産が有っても満足できない。つつましくゆとりを持っている者の

方がましである。

小説、戯曲・・「捜神記」「遊仙屈」「杜子春」**「聊斎志異」**「**三国志演義**」**「水滸伝」**「西遊記」
「金瓶梅」「平妖伝」「紅楼夢」「儒林外史」「三侠五義」「今古奇観」

「遊仙屈」　唐代の中国最初の恋愛小説。かなりポルノっぽい。「肉蒲団」

「杜子春」　明代の作。芥川龍之介がアレンジして有名になった。芥川龍之介の内容とは
ところどころ違う。

「平妖伝」　猿が、狐が、妖人が、妖術を駆使して、縦横に織りなす反乱と平定の物語
結構面白かった記憶があります。
聖姑姑（狐の生まれ変わり）、玉帝、王則（則天武后の生まれ変わり）、蚕子和尚

「儒林外史」　富と権力を求めてうごめく知識階級を痛烈に風刺した長編小説

「三侠五義」　清朝後期の口語小説。名判官と義侠の物語

「今古奇観」　白話短編小説

「聊斎志異」　蒲松齢　清朝初期の人。科挙の試験に何度も落ちた文人。全１２巻、５０３話

「聊斎」は、蒲松齢の書斎の名　「志異」は、怪異・奇異を志（しる）すと言う意味。

超現実的な怪談短編小説集・・・ちまたで聞いた不思議な話を集めた。

「お化けの話」「狐の話」「幽霊の話」「幽霊と結婚した話」「もののけの話」「霊界の話」
「狐と結婚した話」「追いかけて来る死屍」「屋敷の怪」「桃を盗む少年」「狐の嫁入り」
「前世の記憶」「仙人」「大すっぽん」「狐の妻と幽鬼妻」「冥土の裁き」「狐の恩返し」
「狐仙」「狐の生まれ変わり」「縁結び観音」「受験生の心理」「関帝の使い」「菊の姉弟」
「画壁」「公孫九娘」

芥川龍之介、太宰治が、この内容を参考に短編小説を書いている。
　「酒虫」「首が落ちた話」「竹青」「清貧譚」
中国も、ここから題材をとって映画化しているものもある。

科挙の試験　・・・・　予備試験（県試、府試、院試）→（正員）秀才

本試験（郷試、会試、殿試）→進士

殿試の首席→状元、次席→榜眼、三席→探花　　郷試の首席→解元

隋から清の時代まで約1300年間に渡って行われた官僚登用試験。

戦乱の時代、元の時代の一時期には実施されていないこともあったが、安定した治世の時は

常に実施されてきた。

試験は非常に難しく、合格者は地位・名声・権力を獲得し、それを元に大きな富を得ていた。

時代によって試験の内容は変わっていくが、基本的に膨大な知識を求められた。

四書五経、史記等の歴史書等（十八史）

従って、これに合格した者、仮に合格していなくても相当な文化人である人がたくさんいた。

落ちた人　　蒲松齢

合格した人　　阿倍仲麻呂、杜牧、白居易、張継、蘇軾、蘇轍、王安石、劉基、林則徐

「西遊記」　　明中期。呉承恩

中国四大奇書の一つ。
孫悟空の生い立ち、悟空の大暴れ、天界を大いに騒がす。色々あった後、三蔵法師と共に
西天へ旅立つのにお供する。
次々と難に出会うが悟空の奮迅の活躍。　　牛魔王、色々な妖怪。
最後に宿願成就。真経を手に入れる。
孫悟空　→　ドラゴンボール、超能力、マンガ

「大唐西域記」　玄奘
全くの各地の記録書。風土、民族、習慣、物産、人口、仏教徒は何人、等々。
西遊記とは殆ど関係無し。

「**三国志演義**」元末、明初の羅貫中の作。

「三国志演義」は、正史「三国志」（晋の陳寿）をもとに、劉備玄徳が庶民に人気があることから、蜀漢を中心に曹操を悪役として書かれている。正史「三国志」では、魏を正統王朝としている。

蜀漢・・・劉備玄徳、諸葛孔明、関羽雲長、張飛翼徳、趙雲

魏　・・・曹操、曹丕、曹植、司馬仲達、司馬昭、司馬炎

呉　・・・孫権、孫策、周瑜

三国志演義では、魏、呉、蜀の興亡を、曹氏（魏）の後を継いだ司馬氏（晋）が、蜀、呉を滅ぼすまで描かれている。吉川英治の三国志では、諸葛孔明が陣没する五丈原での出来事で終わっている。

「**水滸伝**」明初、施耐庵の作と言われている。

宋の時代、宋江ら３６人が叛乱を起し官軍を大いに悩ました後降伏した事件が、民衆の間に英雄伝説として説話になっていったのを、ほぼ現在の形である「水滸伝」に施耐庵がまとめた。

３６の天罡星（てんこうせい）と７２の地煞星（ちさつせい）の星のもとに生まれた１０８人の豪傑が梁山泊に集う物語。義理と人情の世界

７０回本、１００回本、１２０回本の３種類がある。

南総里見八犬伝

伏魔殿の碑の下を洪信が掘らせたところ、ごうごうと黒煙が吹き上がり、金色の光が八方へ飛び散って行った。ここに閉じ込められていた三十六の天罡星と七十二の地煞星、併せて百八の魔王だったのである。宋江、慮俊義を総頭領、呉用と公孫勝が軍師、武芸十八般の九紋竜史進、暴れ者の李逵、花和尚魯智深、豹子頭林沖、武松、多くの豪傑の義理人情伝、武勇伝が色々つなぎあわされて梁山伯へ手繰り寄せられて行く。

「**金瓶梅**」　作者　笑笑生　1600年頃、明代中期の作。

水滸伝の武松のエピソードを元に別の人物（笑笑生）が小説化したもの。

口話文学では無く、初めての小説とも言える。

「金瓶梅」の題名は、登場人物の藩金蓮の金、李瓶児の瓶、春梅の梅からなる。

３人の女性の生き様も描く。

水滸伝では、藩金蓮と西門慶は、武松に、兄の武大の敵として殺される。しかし、金瓶梅では、殺されず、逆に、武松の方が、西門慶に罪を着せられ、二千里の彼方へ流されてしまう。西門慶は、あちこちと色事に励むが、最後は、藩金蓮が、焦って精力剤を大量に飲ませたため死んでしまう。

享年３３歳。　　百回からなる長編小説。

あらすじ

時は、宋王朝の徽宗の時代。藩金蓮は、夫の武大が不細工な男だったため、あちこち、他の男に色目を使う。弟の武松は、虎退治で有名であり、いい男ぶりでもあるので、武松に色目を使うが相手にされない。そのうち、伊達男の西門慶と道ならぬ関係を結ぶようになった。武大は、情事の現場を押さえるが、却ってやっつけられ病に伏せる。そのあげく二人に毒を盛られる。邪魔者をかたづけた後、二人は、情事にふける。弟の武松は、事情を知って、西門慶を兄の敵として仇討ちをしようとするが、うまく逃げられる。挙げ句の果て、西門慶が役人に手を回し、武松は、二千里の彼方へ流される。水滸伝では、兄の敵の西門慶と藩金蓮を殺した後、流刑にされるが、途中で、色々事件を起こし、梁山伯に逃れる。

藩金蓮は、西門慶の第５夫人となる。その後、西門慶は、あちこちの女に、片っ端から手を出す。

小説では、そのたびに、色事の描写が続きます。又、商売も順調で、事業を拡大していきます。

お金を積んで、官職も手に入れ、一時は、何もかもうまく進みます。

ところが、そのうち、ぽつりぽつりと不幸が発生するようになる。当人も、３０歳を過ぎてからは、精力が衰えてきたため、精力剤に手を出すようになる。

精力剤のため、余計に元気が出て、ますます、あちこちの女に手を出し、体力を消耗していきます。

藩金蓮は、最近、相手にされなくなっていたため、機会があった時、西門慶に元気を出させようと、無理矢理、精力剤を大量に西門慶に飲ませます。

西門慶は、そのまま、どっと病の床に伏せ、翌日、帰らぬ人となります。享年３３歳。主を失った西門家は、その後、急速に、瓦解離散の道をたどる。最後に、正妻の呉月娘は、因果応報の理を悟り、遺腹の子を仏門に托す。

小説では、果てしなく、あちこちの女に手を出し、その度に、情事の絡みの描写が表現されています。描写の仕方は、きわどいものですが、最近のエロ本ほどでは無い。昔の人の表現ですから、むしろ文学的に優れている所もあるようです。私の読んだ本は、あまり、エロっぽいと言う記憶がありません。
もしかしたら、表現を押さえていたのかもしれません。
金瓶梅の舞台は、宋の徽宗の時代となっていますが、実際に表現されている時代は、作者と同時代、明の時代です。
かなり以前に読んだが、当代の社会情勢、風俗習慣が描かれていた。その後、中国古典文学を読むのに、非常に参考になった記憶があります。
関羽の話。道祖神の話。商売の話。しきたり。祭り事。役人、官職の話。当代の風俗習慣、等々・・・・・
金瓶梅は、百回本からなり、そうとうな長編小説です。読むのには、かなり骨が折れますが、一度、読まれては？

「紅楼夢」　　曹雪芹

　絢爛豪華な貴族家庭を背景にくりひろげられる美貌の公子の悲恋物語

　賈宝玉、林黛玉、薛宝釵・・・・・・・

　大観園と言う大邸宅が舞台。

昔、親に隠れて暗い所でこの本を読むあまり、肺結核になった子女もいるという。

登場人物が非常に多い。いつまでたってもすれ違いの恋愛小説？話が長い。

　賈宝玉は、林黛玉が好き。林黛玉は賈宝玉が好き。しかし、賈宝玉は、薛宝釵と結婚することになる。林黛玉はショックで病気になる。

その間に色々な人々の死がからみ、大観園は寂れていく。

私の詠む深さが浅かった。「紅楼夢」は、文章表現、ち密な語り口、複雑さ。裕福な家庭の没落。色々な角度で読んでも深い記述。

紅楼夢は、事前に解説書を読んで、読む角度等を下調べしてから読んだ方が、面白みをもっと理解できたかも？

もっと真剣に読むべきであったと反省？

中国白話小説の最高峰。

　もう一度読んで見たいと言う思いはあるけれど？

詩・・・・「詩経」「屈原」 **「白居易」**「曹操・曹丕・曹植」 **「杜甫」** **「李白」**
「王維」 **「蘇軾」**